

フセイン アブドル=ワヒ ド アミ ン / アイルランド出身の元カトリック

:

明:フセインは、イスラ ムによって示される 然たる一神教の神学思想に 足します。

目:[事新改宗者ムスリムの逸 男性](#)

より: フセイン アブドル=ワヒ ド アミ ン

日 05 Aug 2013

集日 05 Aug 2013

私が最初にイスラ ムについて学び始めたときに感じた かなる真 性、またこの に する精神的苦痛は皆 だったことから、私は今、イエスが人 であったこと、そして彼が多大な尊敬に する、最も 大な神の 言者の一人である一方、神の化身でも、神の子でもなかったのだと述べる事が出来ます。私は、敬虔な一神教徒のユダヤ人だったイエスは、三位一体 を げるキリスト教徒たちが彼についてでっちあげたことに し、ひどく嫌 するであろうと信じます。私はもしムスリムになったらイエスを 切ることになるのではないかと怖れていましたが、それまで、私は には彼について言う 利もないことを言うことによって、 意 の内に彼を冒 していたことに 付いたのです。

私はムハンマドがイエスの に く (最 の) 言者であると信じます。エルサレムにいたイエスの正真正 正の使徒たちが っていたのが、ユダヤ教を 承した真のキリスト教であったように、神の言 の最 示であるイスラ ムこそが、エルサレム ユダヤ人のキリスト教を 承し、完成するものなのです。

私は恋 によってイスラ ムに改宗したのではないことも明 にしたいと思います。しかし、ムスリム女性との 婚の可能性が触媒となり、イスラ ムを するきっかけとなったことは かなです。念のために言うと、彼女との は2001年に破 しましたが、私は依然としてムスリムなのです。

イスラームへの改宗は便宜的なものではなく、私が心から望んだものでした。それはなものでなければなりません。白な心の中に、欺的なものがあったはならなかったのです。神と宗教は、くうには重要 ぎます。それは人の魂が わることなのですから。

私が 在のキリスト教として知られているものを否定したのは、そもそも三位一体 とイエスの神格性を信じることが出来なくなったからです。私は心の底から神の唯一性を信じるようになりました。そして私は、イスラームという宗教がそれを完全に表 していると判断したのです。人的な人 が将来的にどうなろうとも、私はこの信条を持ち けます。

私は に、自分が加わった 大な宗教共同体の人々が、ムスリムであるかどうかに わらず他者に行 を すことを 要するのは、神学的な核心を忘れ、それを葬り去ってしまったからなのではないかと真 に 念します。神はクルア ンにおいて、「宗教に 制はない」と明言しているからです。私は一部のムスリムたちによる、正 なイスラームの 践やあり方とするものの解 に幻 することがある、と正直に告白しなければなりません。タリバンのような思考 式を持つ人々がいるのは、アフガニスタンだけに限定される ではないのです。

そして私は、憎 に ちた政治的思想を持つ人々にもうんざりしています。彼らはそれをイスラームと呼称していますが、 に基本的なイスラーム的 定のほとんどを逸脱したもので、「人は耐え切れないほどの重荷を背 うことはない」という神の 束に する信 が完全に欠如していることを暗示しています。これらの 激主 者たちは、イスラームの普及を数十年 らせてしまっています。 に、私は英国人改宗者マイケル A マ リクの有名な きを反 せずにはいられません。「イスラームは素晴らしいのに、ムスリムたちはなんて酷いのだろう！」

自称ムスリムの 度には 繁に幻 させられるものの、神の唯一性という、神の性 においての信仰を、私は生涯を通して こうと 意しています。

数年前、米国人のプロテスタント派の友人が、マルティン ルタ の 味深い引用をしました。

??

私は自分の持っている、イスラ ムによって示される 一神教の信仰に完全に 足しています。そしてこれは、私の信仰宣言です。

クル フワッラ フ アハド

言え、「かれはアッラ 、唯一なる御方であられる。

アッラ フッ=サマド

アッラ は、自存され、

ラム ヤリド ワラム ユ ラド

御 みなさらないし、御 れになられたのではない、

ワラム ヤクッラフ クフワン アハド

かれに比べ得る、何ものもない。」（クルア ン第112章）

アシュハド アッラ イラ ハ イッラッラ

私は、アッラ 以外に神はないこと、

ワアシュハド アンナ ムハンマダッ=ラス ルッラ

そしてムハンマドが神の使徒であることを宣言します。

への感 の 持ち

最後に、私の 深い感 の意を表したいと思います。彼らは敬虔なカトリックの 践者で、私のイスラ ムへの改宗には神学的理由から く反 しましたが、私の意思を尊重してくれ、私の理解者でもあり、私への 情を わらず注いでくれています。この点について、私は最も祝福されていると感じます。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/666>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。